

Title	<紹介>蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』
Author(s)	是澤, 範三
Citation	語文. 2010, 95, p. 59-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69163
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』

·語構成論的研究」第二弾である。 「あとがき」には次のようにあ 本書は、平成二十二年三月をもって本学を御退休された氏の 是 澤 範 三

辞を伴う派生語を中心に、語構成論的に研究したものである。 は時代を下る用例をも合わせ、カ(・ガ)行に関係する接尾 の上代および中古の用例を中心に、必要のあるものについて 本書は、前書『国語重複語の語構成論的研究』に続き、 国語

目次は、以下のとおりである。

はしがき

第一編 第一章 動 カス型動詞の構成(一) 詞 カス型動詞

第二章 カス型動詞の構成(二)

日本霊異記訓釈「波リ天」考

第二編 形容動詞語幹 ―カ(・ヤカ・ラカ)型語幹―

第一章 カ型語幹の構成

ヤカ型語幹の構成

ラカ型語幹の構成

第四章 (・ヤカ・ラカ)型語幹の語基

形容動詞語幹と動詞

〜カ(・ヤカ・ラカ)と〜ク(・グ)

| カ

(・ヤカ・ラカ)型語幹とク(・グ)

型動詞

第四編 〜ヤク(・ヤグ)と〜ラク(・ラグ) 詞 ―ケシ型形容詞―

第二章

第一章 ケシ型形容詞の構成(一)

ケシ型形容詞の構成 (二)

第三章 **~ケサと~カサ**

第四章 〜カシイ・〜ケシイ・〜カイ

第五編 第一章 ク(・グ)型動詞の清濁 清 ―カ行・ガ行の清濁―

第二章 あとがき **~キと~ギ**

索 引(語句索引・事項索引)

ことをお勧めする。 たがって、本書の大要を知るには、まず「あとがき」を読まれる 「あとがき」に書かれており、それが本書を読む指針となる。し 上記の構成については、各編の内容とともに要を得た解説が

の関係はおおよそのものにとどまる」という。 箇所やかなりの修正を施した箇所もあるので、ここに示す本書と ○○一年までの十九本があげられているが、「新たに書き加えた 「あとがき」にあがる既発表論文をみれば、一九八一年から二

本書における「派生語」とは、阪倉篤義『語構成の研究』(角

までの考察のプロトタイプとなっているからである。章を押さえることとする。本章カス型動詞の考察が、以降第三編本書を紹介するにおよび、まずは本書の導入となる第一編第一

あわせて派生語とされる。

「接合」したもの、および(ロ)に(ハ)が「接合」したものを、

氏はク語尾動詞に「す」の附いた本来型に対し、いわゆる類推作カスを、阪倉氏は異分析による肥大した接尾辞とされ、吉田金彦オビヤカスは、動詞トドロクに接尾辞スがついたものである。このよビヤカスは、動詞トドロクに接尾辞スがついたものであるが、よいカスと動詞であるが、その語構成は異なる。すなわち、なる点でカス型動詞であるが、その語構成は異なる。すなわち、なるにでかる。たとえば、トドロカスとオビヤカスは語尾がカスとものである。たとえば、トドロカスと対対に対し、いわゆる類推作

動詞―②動詞+ス―③動詞+カス)のように、②の例を持つもの分類される。例えば、①オビユ―②オビヤス―③オビヤカス(①見えないとして、中古・中世の例を列挙・網羅される。応用型は見えないとして、中古・中世の例を列挙・網羅される。応用型は挙げられる。一方、上代における応用型(動詞+カス)の確例は、ベーハルグーハルカス・ウゴグ―・ウゴカス・ナビグ―ナビカスをス・ハルグーハルカス・ウゴグ

果であり、そこからカス型動詞の形成過程(本来型〉代入型〉型」といった分類枠があるのも、その分析の緻密さから生じた結という表現、および「準~型」さらには「再応用型」「再々応用用例を、逐一検討のもとになされる。「~に準じてとらえられる」

いものを直接型と呼ばれる。分類作業は文献を博捜して得られたて代入型と呼び、②の例を持たない、つまり、代入の過程を経なを、「スをカスに代えることをスにカスを代入するようにとらえ」

プとして考察は第二編・第三編へと展開する。型語幹・ラカ型語幹)でも近似することから、これをプロトタイこのように示されたカス型動詞の構成は、形容動詞語幹(ヤカ

直接型)が導き出される。

と二次的ケシ型とに分類され、考察される。 応を持つことから、そのような対応を持つか否かで一次的ケシ型アキラケシ(明)など)の多くがカ(・ヤカ・ラカ)型語幹との対る。とはいえ、ケシ型形容詞(シヅケシ(静)、ニコヤケシ(婉)、ととらえられる点で、第三編までの母音交替によるものとは異なる四編(形容詞―ケシ型形容詞―)は、~カが接尾辞シを伴う第四編(形容詞―ケシ型形容詞―)は、~カが接尾辞シを伴う

―ハララカス・ユラケ―ユラカス・ワケーワカス・ツケーツカことの裏付けとして、上代の本来型の例アケーアカス・ハララケ動詞の内、~クに当たる動詞の例が見られるものを本来型である用で起こった応用型と仮称される。これらを承け蜂矢氏はカス型

式)の問題とも絡んで、実は語構成・語形成さらには類推・異分濁および濁音化の問題は、連濁やアクセントの型(高起式・低起の・キック・キッグ(城・築)」や「イザナキ」「イザナギ」など、清濁―カ行・ガ行の清濁―)である。歴史的に見ると、「キッさて、派生語の研究でありながら、一見異彩を放つのが第五編さて、派生語の研究でありながら、一見異彩を放つのが第五編

清濁およびアクセントの知られる信頼できる資料には限界がある。析などの複雑な要因を孕む。にもかかわらず、その検討に必要な

の観点から、ここに記述される。

する接尾辞を伴う派生語は、本書により整理されたといってよい方法により逐一解明していったものであり、カ(・ガ行)に関係生語の構成として不明瞭であった古代語の語群を、一貫した分類本書は恩師阪倉篤義氏が先鞭をつけた語構成の問題のうち、派

させて、なつかしい。 氏の講義での語り口とほぼ同じとなり、かつての講義風景を彷彿 妖の講義での語り口とほぼ同じとなり、かつての講義風景を彷彿 村言すると、本書での論証の記述をデス・マス調に置き換えれば、 語彙の語構成史・語形成史が記述されていくその過程にあろう。 語彙の語構成史・語形成史が記述されていくその過程にあろう。 にの講文の魅力は、博捜し吟味された用例に基づく緻密な考察

とまりを見せるかは、今後にかかっていると言わねばならなに考えるかという問題もある。それらの検討がどのようなまなどを伴う派生語をむしろとり挙げるべきであるという問題などを伴う派生語をむしろとり挙げるべきであるという問題などを伴う派生語をむしろとり挙げるべきであるという問題などを伴う派生語を対した。後尾辞ヤ・ラなどを伴う派生語を対象氏は「あとがき」に次のように述べる。

か、これからも学ばせていただきたい。今後生み出される論文とどのように関係し、まとめられていくの本書には編まれなかった重要な論文がまだ多数あり、それらが

注

第十七回新村出賞を受賞した。(1) 重複語を中心に考察した前書(一九九八年塙書房刊)は、同年、

2 その派生語もすべて低く始まる。」というもの。 生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、 「ある語(のアクセント―是澤注)が高く始まるならば、その派 つか」(『金田一博士古希記念言語民族論叢』三省堂)によれば、 金田一春彦(一九五三)「国語アクセント史の研究が何に役立

付記

したい。 研究するものにとっては貴重かつ興味深い lexicon であり、恩恵に浴 成要素を含む)から数え上げると、約一四五○語であった。古代語を 本書の素材ともいえる語句の数は、二十八頁に及ぶ語彙索引(語構 (岩波書店、二〇一〇年三月、四四八頁、一三〇〇〇円)

(これさわ・のりみつ 京都精華大学講師)